同窓会会報

第32号

昭和57年7月20日
発行所
茨城県東茨城郡内原町鯉渕5965
鯉渕学園同窓会
印刷所
佐藤印刷株式会社

寮史・同窓会史を編集
二年計画で刊行を予定

同窓生、在学生の皆さん、この度、四〇年にわたる学園の学生生活と同窓会活動を同窓会として収録すべく、「鯉渕学園寮史」(仮称)の編集を計画しました。同窓生、在学生各位のご賛同とご協力を得て、鯉渕の青春と理想をとりまとめ、それぞれの人生のひとこまとして載きたいと存じますので特段のご配慮をお願いいたします。

昭和五十七年七月　　同窓会会長　和田文雄

同窓会館の建設が終ってから、同窓会としての事業もこれといってとりたてて行ってきませんでした。

学園に三十周年記念行事を行うかどうか、行うならばいかなる協力をすればよいかなど、学園側に申し入れておきましたが、何をしてほしいという答もないままに過ぎてきていたので確認したところ、特に何をするという計画もないので、協力もいらないという返事でした。

このため同窓会としても三十年記念事業を特に計画することなくすぎてきました。ところが、同窓会館完成後の同窓会大会は毎年、学園の先生方を含めても五十人前後の出席で、会館の談話室で行うことができる状態で、かつて二百人、三百人と同窓生が集った大会にくらべてさみしい会合となり、事務局をなげかせ、何もしていないということはよくないことだと多忙となることをかえりみず、同窓会として新しい事業を模索していました。

学園に何をする計画もないということは、することは何もないということであるかどうか、であるが、目下同窓生との交流がうすくなれば、学生募集にも影響しようというもの、また教育施設にしても、他の大学農学部とくらべ、人的、物的に何もすることがないということがいきさか井中の蛙の感があるところである。

ところで、同窓会の本来の目的は同窓生の親睦をはかることにある。とすれば同窓生に直接関係する事業を計画し、実施することがよいことになる。真の学園をあらわすものは、学生であり同窓生である。その同窓生の姿を、学生の姿を何らかの形でとりまとめることができないものか、若き者は来年志望す後輩に、年老いた者は孫たちにその青春と理想を語りつがなくてはなるまい。それが、鯉渕村字中台の鯉渕学園史ではなかろうか。

隣村の下中妻村字内原が、日本中どこへいっても"内原"で通用すると同じに鯉渕村がどこへいっても"鯉渕"で通用する今日、その源である鯉渕学園の学生を物語る寮史、同窓会活動の大きな歩みを編集し、同窓生の心に青春の灯をもやしつづけたいものである。

今後、同窓生、学生の要望、意見を集めて編集計画をつくることとするが、当面の計画を次のようにしてはどうであろうか。

案

一、本の名称　「鯉渕学園寮史」

二、収録すべき内容

① 全寮生活
特徴…教育方針としての全寮生
全寮制とは何か…同窓生、学生の意見

② 鯉渕学園の春秋…寮生活を語る
期別座談会　1～3期　4～10期
11～20期　21～36期

③ 職員座談会…事務・農場・教職
学生自治会
自治会の活動・自治委員会の歴史
自治会活動の思い出

④ 寮生活秘史
後輩に申し送った㊙事項
先輩から引継いだ㊙事項
私の思い出

⑤ 寮誌
……個人的寮生活日記
……組付日誌

⑥ 同窓会活動
同窓会の結成10年・20年事業
学園事業への協力
同窓生としての考える学園教育のあり方

⑦ 特別寄稿
教職、近くの住民、消防団、役場

⑧ 愛唱歌集

三、刊行の計画
① 五七年着手
五八・一一　大会で大要検討
五九・春　完成
② 編集委員
期別に十人前後を選任する。

③ 費用

頁数　四〇〇～五〇〇頁写真頁含

印刷部数　同窓生・在学生・若干の寄贈　計　四〇〇〇部

頒布価格

一部三〇〇〇～四〇〇〇円

④ 学園在職卒業生に編集準備委員七人を去る五月十五日の常任委員会で委嘱し準備にとりかかった。

編集準備委員会

菊地崇(27)　小沼和重(29)　入江三弥子(29)　山本英治(31)　涌井義郎(31)　吉富克之(32)　岩間久子(36)

青春の証しを是非刊行すべく準備に入りましたので、期別、あるいは個人で準備の心構えをはじめて下さい。また、写真などもお借りすることになると思いますのでご提供をお願いいたします。

第15回同窓会大会の報告

第十五回同窓会大会は、昭和五十六年十一月七日午後三時より、同窓会館を会場として開催されました。

先ず、和田会長の挨拶、吉川学園長の祝辞をいただいた後、議長に栃木支部篠原要一氏（十期）を選出して議事に入り終始熱心な審議が行われ、無事全日程を終了しました。

承認並びに議決された議案は次の通りです。

一、昭和五十五・五十六年度事業報告

第十四回の決定に基づいて、実施いたしました両年度の事業は次の通りであります。

(一) 会報の発行

第二十八号　昭和五十四年十月

第二十九号　昭和五十五年一月

第三十号　昭和五十六年一月

第三十一号　昭和五十六年九月

(二) 会員名簿の発行

大会の決定では、会員増による補充版を名簿の一部訂正も含めて発行するということでしたが、住所等の変更が多く、五十六年度版の会員名簿を発行することとし、常任委員会の承認を得て発行の準備をすすめてまいりました。十月上旬に発行する計画が十一月にのびそうです。

※十二月の初めに発行され、各支部長、注文者には発送済

(三) 支部総会への役員の派遣

両年度の間、支部総会への役員の派遣は次の通りでした。

沖縄支部　和田会長出席

新潟支部　坪野常任委員出席

岐阜支部　砂田常任委員出席

群馬支部　高橋事務局長出席

(四) 基本金の増資

会報並びに同期会を通じて、基本金の増資のための募金をお願いしましたところ、三十四万三千円の募金がありました。

(五) 学園に対する協力事業

① 鯉渕学報の発行に対する助成

鯉渕学報第三号が昭和五十五年九月に発行され、発行費の約半額を本会が負担しました。

② 学生募集への協力

昭和五十六年度の入学者数は、例年にない落ち込みで、定員を大きく下まわったことから、支部への協力の依頼と

表2　昭和55.56年度基本金会計決算報告書

(1) 財産目録

摘要		金額	内訳
資産の部	現金	0	
	預金	675,076	普通預金（郵便局）
	貸付金	600,000	一般会計に貸付
	合計	1,275,076	
負債の部		0	
純財産		1,275,076	昭和54年度末 287,815 昭和55・56年度増資分 987,261

(2) 収支明細表

収入の部

科目	金額	内訳
入会金	609,000	昭和55年度入学 117×3,000円 56 86×3,000円
募金	343,000	31名並びに33期会
預金利子	35,261	
合計	987,261	

支出の部

科目	金額	内訳
貸付金	600,000	一般会計に貸付
預金	387,261	
合計	987,261	

差引残高　0

支出の部

科目	予算額	決算額	比較増減
会費発行費	1,052,000	830,710	△ 221,290
支部長会議費	700,000	0	△ 700,000
名簿発行費	200,000	296,120	96,120
通信費	200,000	87,375	△ 112,625
人件費	600,000	536,295	△ 63,705
事務費	150,000	91,090	△ 58,910
旅費	330,000	237,300	△ 92,700
鯉渕学報助成費	400,000	150,000	△ 250,000
会議費	250,000	134,321	△ 115,679
予備費	338,282	73,000	△ 265,282
合計	4,220,282	2,436,211	△ 1,784,071

差引残高　24,277

会報第三十一号を学生募集の特集号とするなどして、学生募集への協力活動を展開しました。

③農民教育協会理事に和田会長就任

本会の会長を農民教育協会の理事として送りこむことになり、和田会長が理事に就任しました。

二、昭和五十五・五十六年度決算報告

昭和五十五・五十六年度の一般会計基本金会計の決算報告書は表一、表二の通りです。

三、監事報告

昭和五十五・五十六年度事業報告並びに決算報告書は、正確適正であることを認めます。

昭和五十六年十一月三日

鯉渕学園同窓会監事　武内　十郎㊞

張替誠一郎㊞

鈴木　光雄㊞

四、昭和五十七・五十八年度事業計画

(一) 会報の発行

第三十二号　昭和五十六年十二月

第三十三号　昭和五十七年六月

第三十四号　昭和五十七年十二月

第三十五号　昭和五十八年九月

(二) 本会組織の強化

(1) 本会活動の充実

(2) 支部組織の強化

(三) 基本金の増資

(四) 学園に対する協力

(1) 学生募集への協力

(2) 就職活動への協力

(3) 鯉渕学報発行の助成

五、昭和五十七・五十八年度予算

昭和五十七、五十八年度予算は別表の通りです。

六、昭和五十七・五十八年度役員

会長	和田文雄	3	東京
副会長	桜井昭利	2	学園
常任委員会副会長	鈴木光雄	8	茨城
常任委員	小泉信吉	4	〃
〃	後藤功一	9	〃
〃	真下寿宣	11	〃
〃	本宮好美	12	〃
〃	梅崎孝臣	13	〃
〃	岡野ちか	13	〃
〃	藤井文信	4	東京
〃	石田善吾	13	〃
〃	藤井隆之	13	〃
〃	西村典夫	4	学園
〃	砂田義雄	5	〃
〃	坪野敏美	7	〃
〃	吉沢秀子	7	〃
〃	高橋隆三	9	〃
〃	枝川重二	13	〃
〃	菊地崇	27	〃
〃	小沼和重	29	〃
〃	入江三弥子	29	〃
〃	山本英治	31	学園
〃	湧井義郎	31	〃
〃	吉富克之	32	〃
監事	武内十郎	4	東京
〃	張替誠一郎	5	茨城
〃	家村永昌	9	〃

昭和57・58年度予算

(1) 一般会計

収入の部

科目	予算額	摘要
前年度繰越金	24,277	
会費	3,600,000	1,800×2,000円
名簿代	1,400,000	700部×2,000円
鯉渕学報代	50,000	100部×500円
その他収入	50,000	
合計	5,124,277	

支出の部

科目	予算額	摘要
会報発行費	1,100,000	
名簿発行費	1,200,000	1,000部×1,200円
通信費	200,000	
人件費	600,000	
事務費	120,000	
旅費	300,000	
鯉渕学報助成費	200,000	第4号
会議費	150,000	
予備費	654,277	
借入金返済	600,000	
合計	5,124,277	

(2) 基本金合計

科目	金額	摘要
昭和56年度基本金総額	1,275,076	
昭和57・58年度入会金	720,000	各年度120名×3,000円
一般会員よりの増資分	300,000	
合計	2,295,076	

表1　昭和55.56年度一般会計決算報告書

(1) 財産目録

摘要	金額	内訳
資産の部　現金	24,277	〃
名簿在庫	150,000	100部×1,500
合計	174,277	
負債の部　借入金	600,000	基本金会計より借入
純財産	△ 425,723	

(2) 収支明細表

収入の部

科目	予算額	決算額	比較増減
前年度繰越金	120,282	120,282	0
会費	3,500,000	1,633,572	△ 1,866,428
預金利子	50,000	20,034	△ 29,966
名簿代	100,000	72,300	△ 27,700
鯉渕学報代	400,000	11,500	△ 388,500
借入金	0	600,000	600,000
その他収入	50,000	2,800	△ 47,200
合計	4,220,282	2,460,488	△ 1,759,794

昭和五十八年度

入学学生募集についてのお願い

鯉渕学園教務課長

同窓会のみなさまには相変らず御清祥の御事と存じ上げます。

さて、学園の学生募集のことにつきまして、昨年は同窓会長、各県支部長はじめ同窓会のみなさまに特段の御配慮をお願い致しましたが、お蔭をもちまして、五十七年は若干持ち直し、応募者数一三一名、入学者数一〇三名を得ることができました。各位の御協力に厚く御礼申し上げる次第です。

学園は創設以来三十五年の長きにわたり、わが国農村の第一線にあって腰をすえて農業生産、農家生活の改善発展に取組む多数有為の人材を社会に送り出して参りました。その間に培われて参りました「行学一致」の学風は、営々として築かれてきた実習農場の施設と指導体制、あるいは広い視野をもった人格形成をうながす全寮自治制と教科内容とともに、他に他の真似できない独特のものを現在に継承してきております。

しかしながら、わが国農業を取巻く諸般の情勢は激変に激変を重ね、わが国経済構造の中での農業の地位は目ましに押し下げられてゆくかに見え、したがって学園の存在価値に対する認識が一般に薄れつつある傾向を感じられます。このときに当って、われわれ学園サイドはこの特長ある学校こそ、わが国農業の将来にとって欠くことのできぬ重要な意義をもつものとしてこれを守りぬく決意であります。

同窓会のみなさまにおかれては、時代の進展に伴う世代の交替とともにやもすれば学園に対する一般の認識が薄れてゆく中で、この際以前にまして新しい世代の人々に学園の存在に気付くよう御宣伝をお願い致したいと存じます。学園サイドと致しましても、従来以上に広告に工夫を凝らして参りますが、やはり最も効果あるものは学園卒業生のみなさまの身をもっての御宣伝であると信じております。

〔付記〕昭和五十八年度入学の学生募集におきましては、みなさま既に御承知かと存じますが、五十九年度から農業改良普及員資格試験の制度が改正され、受験資格が四年制大学卒相当になったことが問題になると考えられますので、この点について若干御説明を申上げておきたいと存じます。

五十七年度入学学園生には制度改正の移行措置として農水省が特例をもって本科三年卒業見込みで受験資格を認めておりますが、五十八年度入学生については、それが本科三年に達する六十年度には受験資格を認められなくなりました。ただし、これで全く普及員への途がとざされてしまったわけではなく、卒業後一ケ年以上、農水省の規定する農業に関する試験研究・教育・普及指導の職務を経験すれば受験資格を得ることができます。しかし、これは経験見込みではありませんので、五十八年度に入学したものは六十二年度試験を受験できることになります。

このような制度改正に対応致しまして、学園サイドでは農水省が今後の課題として構想している「新農業講習施設（短大二年卒を入学条件とする修業年限二ケ年間の専修教育機関）に相当するものとしての、学園本科二年修了者を主体として、農業関係二年制短大卒業者を入学せしめる普及員養成施設を、できれば五十八年度入学の学園生が本科二年に達する五十九年度中に（六十年度より開講）設置したいものと学園教育体制の再編を鋭意検討中であります。

申すまでもなく、この養成施設の設置には農水省の認定が必要で現時点では未だ設置を確言できる段階にはありませんが、これが実現できないときにも、五十八年度入学の学園生が本科三年を卒業した後、一ケ年間、農水省が規定する農業に関する教育または、試験研究の職務に本学園内において経歴しうるよう（すなわち六十二年度試験に受験しうるよう）措置を講じたいと考え、この面についても目下鋭意検討、努力中であります。

このような学園サイドの対応が実現できるかどうかは、一つには五十八年度応募者が相当数を確保しうるかどうかにかかっております。本学園の一つの重要な特長である全寮自治制は実は学生が北は北海道から南は沖縄にいたる全国から集ってくることによってはじめて他に類例のないものとなっていることは同窓会のみなさまの良く御承知のところであります。学園サイドと致しましては各種広告の外に「鯉渕学報」その他学園の教育活動に関する情報の積極的提供に努めたり、及ぶべく学校訪問を行い応募者の獲得に努力いたしてゆく所存でありますが、募集の対象が全国にわたりますために、全国各地に御活躍されている同窓会のみなさまのお一人お一人の御宣伝と応募者推薦の労を、ここに重ねてお願い申上げる次第です。

御挨拶

昨年の十二月二日に学園の教授を命じられました。早くも半年の余も経ってしまいましたが、この誌面をおかりして一言御挨拶を申し述べたいと存じます。

私は大正十三年生れ、当年五十七才。昭和二十二年九月に東京大学農学部の農業経済学科を卒業、農林省開拓研究所に入所いたしまして、以来三十五ケ年間、農林水産省の試験研究機関で農業経営研究に従事して参りました。出身地は東京。

私は完全な都会育ちでありますが、農家・農村の生活実態について比較的良く知っているほうであると思っています。それにはいろいろとわけがあるのですが、要するに、高校（旧制）時代から「体験学習」の癖があったためであります。農業・農村・農家・農民あるいは農政・農業経済・農学に関心をもったのはそれなりの動機があったのですが、「知るには先ず体験をもたねばならぬ!!」と思い込んでいたのは、父の教育が然らしめたように思います。

「習うより馴れよ」が父のモットーでありました。

私は中学(旧制)四年生のときに「将来自分は名村長になろう」と志を立てました。どうしてそんなことを思い立ったのか？は申し上げませんが、とにかくそう思い定めてしまった私は、高校にはいった当初の頃から農業経済学、農村社会学、農政学の専門書を読みかじっておりましたが、絶えず自分を農村・農家の中に持込むことを考えておりました。

高校一年のとき、私は満蒙開拓学生義勇軍というものがあることを知り、これに参加して夏休みの一ケ月を満洲の開拓団で勤労奉仕をしてきました。（そのとき出発前の訓練を内原訓練所で受け、日輪兵舎に何日か寝起きし、朝食前に開墾鍬をかついで二里駈け足をしました。加藤完治先生の講話も聞きました。ですから、内原・鯉渕の土地は今から四十年前に既にふんでいたわけで、着任いたしましたとき、本当に懐しく思いました。）それというのも、私は農業の現場にはいり込みたかったからであります。「拓殖」という事業に特に関心があったわけではありません。この経験は都会育ちの私に、本を読んだり講義を聞いたりすることでは得られぬ実にたくさんな農業について考える材料を私の身体に刻みつけてくれました。

高校二年になりますと勤労動員の割当てが増えて参りました。私は工場でなく援農のほうを希望して、埼玉県の春日部に近いところの古荒川悪水路改修工事に参加しました。これも得がたい体験であったと今でも思い出します。後年、北陸農業試験場におりましたとき、新潟県の稲作生産力の形成史の研究をいたしまして、土地改良が農業経営の発展にどのように寄与していったか？を明らかにしようとしましたが、この研究を行うとき、この改修工事の体験がたいへん役立ちました。農業にとって土地改良は重要な意義をもっていることは誰でも解ることですが、土地改良というものがどんなものか？はトロトロの粘土層を掘上げたり、モッコを担ったり、トロッコを押したり、水の流れ方の変化を見てよろこんだりガックリしてみないことには本当のことは解らないと思います。

この改修工事に参加したことが縁となり、私は大学時代、このあたりで四町歩経営を営なむ大農家の作男に住みこんで、通算十八ケ月の学外実習をいたしました。そのとき私は「作男」の身分でこの改修工事の賦役に出されました。都会育ちの私は土方仕事では半人足です。そこで、小作農家の出役者は私に聞えよがしに私の住込んでいる家の御主人様の悪口をいいます。「〇〇（屋号）のウチはこんな半人足を出して一人前に一人分の賦役を出したつもりでいるんだろうか？」というわけです。そして、いざトロッコを押す段になって「一、二の、三ッ」で私以外の三人が肩を抜いたのです。私は危うくトロッコにひかれて死ぬところでした。「農家階層」というものの意味を知ったのはこのときです。

話は元に戻りますが、先程申上げた研究の結果は「日本農業発達史、別巻の下」にのっております。この研究報告は南・関・須田の共著となっております。この関というのは学園四期の関正治君のことです。私は北陸農試で八年間、関君とコンビを組んで本当に良く働きました。それもお互いに「体験学習派」であったのでウマが合ったのだと思っております。

農業に関する「体験」なき知識の詰込みだけの学生を大量生産している時代に、鯉渕学園では未だ「体験学習」が豊富に残っている。この学校をどうやって存続させてゆくか？卒業生諸君の御鞭撻と御支援を切にお願い申上げて御挨拶と致します。

同窓会員名簿発行

昭和56年11月完了

発行部数 一、〇〇〇部

頒布価格(送料共) 二、〇〇〇円

※申し込みは今すぐ事務局へ

小出満二先生著作集を刊行

農業教育、人間教育の真髄を座右に

小出満二先生が亡くなられてから、はや二十六年がたちました。

昭和二十年敗戦の混乱の中に高等農事講習所長として就任され、戦中と戦後、全体主義と個人主義、天皇制と民主制といった、若い学生たちにとっても、日本にとってもまさに経験したことのない大変革に遭遇したわけですが、この混乱と占領軍政の中にあって、自由と民主主義、人間と農業について、目と心を開かせて下さったことをつい昨日のように思い出します。

直接、教室や舎宅で教えを受けた学生にとっての想い出はまた格別でありますが、先生が亡くなられてからの学生にとって、現在学する学生にとっても、学園長小出満二先生についての伝説的な語りつぎ、語り草は学園教育の主柱となって引き継がれ、学園の伝統をつくり、学園教育の根幹となっています。

この度、小出先生が教職にあった九州大学、鹿児島高農、東京高農の関係者と相はかり、小出先生が実践された人間教育、農業教育に関する著作を再収、複刻してひろくお頒ちすることが現下の教育問題、農業問題に一条の光芒を与えるものと確信して、小出満二先生著作集を刊行する運びとなりました。

東畑精一先生、近藤康男先生に刊行委員代表をお願いし、各学校の卒業生をもって編集委員会を構成しました。

特に学園からは西村典夫先生に農業教育部門の責任者となって戴きました。また三十五期卒業の渡辺善雄さんが、「小出満二先生の教育」を卒業論文にまとめられたことから、渡辺さんには資料の提供と西村先生と共に農業教育部門の編集に参加してもらっています。

石橋幸雄先生には、鹿児島高農の代表として参加をして戴いていますが、当然学園で戦後のおつき合いが一番強く、西村先生とともに編集にあたっていただくことになっております。

著作集の刊行計画と申込については同封しました趣意書及び振替をご利用戴き直接刊行事務局へ申し込んで下さい。

（和田文雄）

申し込みは直接刊行事務局へ

（七月以降も可）

新井先生 白田先生 謝恩募金について

諸兄姉の皆さんには、益々御健勝で御活躍のことと存じます。

さて、お聞き及びのことと存じますが新井正雄先生と白田喜代志先生は、本年三月末をもって、定年のため退任されました。両先生とも引き続き嘱託教授として教鞭をとっておられます。

白田先生は一期生が鯉渕に入学した昭和十八年から、新井先生は昭和二十二年から今日まで、それぞれ三十五年余の長きにわたって学園に在職し、教育にあたっていただきました。

両先生のお人柄については、今更申すまでもなく、円満な人格と確固たる信念で子どもの教育にあたられ、多くの卒業生の心の支えともなっていると思います。

両先生は、長い年月にわたる生活に区切りをつけられ、新しい生活に踏み出されました。私どもは両先生に心から、長い間ご苦労様でしたを申しあげたいと存じます。

そこで、卒業生の仲間と相語らい、一区切りをつけられたこの際、両先生にささやかな感謝の意を表したいと存じ、ここに卒業生諸兄姉に左記のとおり謝恩の募金を呼びかける次第です。

記

一、募　金　一口　一、〇〇〇円（何口でも可）

一、募金の方法

(1) 送金　同封の振替用紙をご利用下さい。現金の場合は左記あてにお願いします。

(2) 〒三一九―〇三
東茨城郡内原町鯉渕鯉渕学園内
謝恩募金会代表　入江三弥子

(2) 募金の期間
昭和五十七年九月三十日まで

一、両先生へのお届け
時期と方法については発起人代表にご一任願いますが、両先生の募金を一括して受付、折半してお届けしたいと存じます。

昭和五十七年七月

新井・白田両先生謝恩募金会
発起人（アイウエオ順）
○入　江　三弥子
伊　藤　とし子
小　泉　信　吉
桜　井　昭　利
高　橋　隆　三
坪　野　敏　美
野　口　美千代
三　次　えい子
和　田　文　雄
涌　井　みよ子
（○印　発起人代表）